

あの時、御遺体を収めたはずの墓は空でした。墓の外で泣くマグダラのマリアに「なぜ、生きておられる方を死者の中に探すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。」(ルカ 24:5)と天使が告げました。その後、「マリア」と呼びかける声がありました。イエス様の声だとマリアは分かったのです。かつて声をかけてくれた時と同じだったに違いありません。「生きておられる？」なんという驚きだったことでしょう。その時のイエス様の姿、形はどのようなだったのでしょうか。

使徒パウロは「つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。」(1コリ15:44)と、復活について説明しています。イエス様は霊の体となって、弟子たちによみがえられた姿を示した。つまり、生きて働かれる命の言葉となって、また、すぐそばにいて下さると心が熱く燃える力を感じられる存在となったということでしょう。それを具体的には、どのように考えればいいのでしょうか。

イースター・カードには、復活されたイエス像が描かれているものは稀です。復活した姿は「霊の体」ですから、それを描くとなると、幽霊、亡霊のようにならざるを得ないのでしょうか。私は Heirich Hofmann(1824-1911)の最晩年作の「キリスト像」の絵が大好きで時々眺めます。彼のイエス像は端正です。「ゲッセマネの祈り」、「神殿の少年イエス」、「富める青年とキリスト」等、親しまれ、多くの人に愛されていますが、これらの絵は NY の Riverside Church が所蔵しています。



Hofmann の「復活のキリスト」という絵がデンマークの Vaeggerlose 教会の祭壇にあると知りました。同教会のサイトで見ることができました。イエス様の高貴さと力強さが描かれていて、「白地に赤の十字架の旗」を死に打ち勝った勝利の印として持っています。是非とも、もっと明瞭な画面で見たいと思います。

この教会は中世に建てられた教会です。20世紀に入って、建築時と同じ時期の



ものと思われるフレスコ画が天井近くの壁に発見されました。それは「エマオでの食事」の絵です。この絵は無名の職人の手によるものですが、イエス様を始めすべての人物が当時の時代の風俗で描かれていて、非常に現実的で、生き生きとして、イエス様と一緒にいる喜びが伝わってくるようです。「ガリラヤでお目にかかれる」と天使が告げたように、毎日の生活の中におられる姿です。

マグダラのマリアと違って、復活したイエス様の姿も声も知らない者にとっては、イエス様の姿は想像の域を出ません。現実的に考えれば、中東の人の顔であり、古代アラムの言葉でしょう。

幸いなことに、日本語に翻訳した聖書によって、イエス様は日本語を聞き分け、日本語で話して下さる。教会で共に祈る時、また、深い孤独の中で呻くように呼ぶ時、そして、苦しみに耐えようとする時、イエス様が共にいてくださることを感じます。その時、心がこだわりから解き放たれ、感謝の思いが湧き上がります。この喜びは私にとって、命の水なのです。いつも「エマオでの食事」の絵のように、日常の中にイエス様がいて下さると感じたいと願っています。